

令和元年6月20日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02682

研究課題名(和文)中国語教育文法シラバス設計のための投射モデルの適用可能性

研究課題名(英文)The applicability of the projection model: A designing method of Chinese pedagogical grammar

研究代表者

鈴木 慶夏 (SUZUKI, Keika)

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：80404797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は日本語を第一言語とする中国語学習者がより容易・より早期に目標形式を産出するための文法シラバスの設計方法構築を最終目標とし、この目標を達成するための一手段として、投射モデルの中国語教育文法への適用可能性を明らかにすることを目的としていた。

結果的に、研究環境に変化が生じたため学習者調査の実施は能わなかったが、研究の過程において、本課題が掲げる最終目標に近づくためには、投射モデルの適用可能性を確定することよりも、教育現場で実際に運用される文法インストラクションによって習得上の難易度を抑える方法を体系的に探るほうが現実的であり、実用的意義があるのではないかという、強い示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「学習者に習得上の利益をもたらす中国語教育文法のシラバス設計」について、これまでの教育的慣行を見直す必要があることを指摘した。研究課題は、当初の目的とは異なる方向に進んだが、中国語教育における目標言語の分析(中国語学)と学習者言語の分析(第二言語習得)がリンクされなければならないにも関わらず、未だそれが実現していない空白部を補強する方法を探り、今後、中国語教育学界が向き合わなければならない理論的・学術的意義を兼ね備える原理と方法論(教育的妥当性に裏付けられたシラバス設計の原理と方法)を討議・考察する必要性を論じた。

研究成果の概要(英文)：The ultimate goal of this research project was to construct a designing method of Chinese pedagogical grammar to enable Japanese-speaking learners of Chinese to produce target forms of Chinese sooner and easier. As one means to achieve this goal, this research was aimed at clarifying the applicability of Zobl's (1983) projection model for designing Chinese pedagogical grammar.

Due to changes in the study environment after the research was begun, the investigation survey of learners could not be carried out. However, the study findings indicate that rather than verifying the applicability of the projection model, it is more realistic and practical for the purpose of designing Chinese pedagogical grammar to devise systematic grammar instruction of L2 Chinese to reduce the difficulty of grammar learning.

研究分野：外国語教育

キーワード：中国語 教育文法 文法シラバス シラバス設計 投射モデル

1. 研究開始当初の背景

(1) 「難度が低い(と見なされた)文法項目を先に学習する」教育的慣行を批判的・学術的に考察する必要性があった。

中国語教育における文法シラバスは、研究当初は、理論的・実証的な根拠を備えているとは言えない状況にあった。中国語教育従事者の間で、「易しい文法項目を先に学習するのがのぞましい」という直感や印象が広く共有されていたが、先行研究が示すとおり、①難易度を判断する基準は多岐にわたり、各基準間の相互関係は未整理の状態にあった。②さらに、文法項目の学習順序と習得順序の不一致も指摘されており、実際には、難度の高い項目を先に導入している場合もかなりあった。③また、難度の低い文法項目から学習することが一番効果的であるという保証もなかった。

(2) 中国語の文法習得における投射性項目を明らかにする必要性があった。

言語類型論と第二言語習得の隣接領域にまたがる投射モデル (projection model) では、より基本的でない(有標性が高い、または、難度が高い)学習項目(例: He is reaching there)を先に学習すると、より基本的な(有標性が低い、または、難度が低い)学習項目(例: He is running)の習得が促進されることを示唆しており、その理論的・実践的価値が有望視されていた。しかし、研究例は一部の印欧語の関係節(Gass1982等)や人称代名詞(Zobl1985)、日本語の格助詞「で」(秋葉2010)等に限られ、中国語学習者を対象とする研究は為されていなかった。

2. 研究の目的

そこで、本研究課題は、中国語の文法シラバス設計が客観的根拠の裏づけを得られるように、「どのような項目がどのような理由で難しいのか」を明らかにすることを最終目標とし、Zobl(1983)が提起した投射モデルの適用可能性を、中国語学と第二言語習得研究の両面から理論的・実証的に分析しながら、中国語のどのような文法項目が投射性項目であるかを示すことを研究目的に設定した。分析事例として、現代中国語の各種補語(結果補語・方向補語・可能補語)をとりあげ、次の2点にフォーカスを当てることにした。①方向補語の派生用法を先に学習することが基本用法の習得に投射されるか、②可能補語を先に学習することが結果補語(および方向補語)の習得に投射されるか。

3. 研究の方法

(1) 方向補語の派生用法を先に学習することが基本用法の習得に投射されるか。

方向補語は、通常、基本用法(“走進去”[歩く+入る+話者の視点から遠ざかる]→「(歩いて)入っていく」等)を先に学習し、派生用法(“聽進去”[聞く+入る+話者の視点から遠ざかる]→「聞き入れる」等)を後に学習するが、様々な派生用法の習得がなかなか進まないことは、国内外の中国語教育従事者が共通して抱える難題であった。

そこで、本研究課題では、「文法項目によっては、基本用法の提示以前に派生用法(より基本的でない項目)を学習した方が、基本用法・派生用法の両方の習得が促進され、かえって効果が上がる可能性」の真偽を確認するために、方向補語という文法事項に関して、教授実験と学習者調査を実施し、先に派生用法を学習し後に基本用法を学習すると従来と比べて習得状況が改善されるかを明らかにしようとした。

(2) 可能補語を先に学習することが結果補語(および方向補語)の習得に投射されるか。

国内の主たる教育的慣行では、「結果補語(“找到了/没找到”[見つけた/見つからない]等)→方向補語(“聽進去了/没聽進去”等)→可能補語(“找得到/找不到”[見つけられる/見つけられない]、“聽得進去/聽不進去”等)」という導入順序をとる。しかし海外では、これとは逆に、「可能補語→結果補語または方向補語」という学習順序をとる教科書もある(米国・豪州等)。

そこで、本研究課題は、「結果補語と可能補語のうち、どちらを先に学習する方が、どのような点で難度が高く、どの程度投射効果が認められるのか」を確認するために、教授実験と学習者調査を実施し、日本語を母語とする中国語学習者が先に可能補語を学習し後に結果補語を学習すると従来と比べて習得状況が改善されるかを明らかにしようとした。

4. 研究成果

最終結果から言えば、研究代表者の所属大学でカリキュラム変更があったこと、研究遂行3年目に異動したことにより、学習者調査を実施することが能わなかったため、結論は導きだせなかった。しかし、教授実験とそれに対する分析・考察の過程で、当初は想定していなかった

発見もあった。本研究の成果は、次のように整理できる。

(1) 調査範囲は限られるが、初歩的な学習調査と学習者への聞き取り調査において、中国語の補語（結果補語・方向補語・可能補語）が投射性項目である可能性が極めて高いという仮説が得られた。そこで、仮説の検証に着手し、検証の過程で、結果補語・方向補語・可能補語という三種類の補語の習得難度を明らかにするには、文中の目的語名詞句を文頭に配置する主題化構文が習得済みでなければならないことが判明した。そのため、「ライティング支援としての“i+1”」というタイトルで、主題化の習得を促進させる文法インストラクションの方法を、ライティング指導の内容にもとづき整序した。

(2) これと並行して、前置詞句の統語配置についての研究成果を国内外で発表した。前置詞句を動詞句に前置させる難度のより高い形式を先に教授し、前置詞句を動詞句に後置させる難度のより低い形式を後に教授していた従来の文法シラバスを再検討し、学習者に提示する文法範疇や構文形式に調整を加えることで、習得難度を抑制できることが明らかになった。(1)と(2)での研究過程において、文法シラバスの設計方法を具体化するには、実地に行う文法インストラクション（文法指導法）のあり方が大きく関与することがわかった。

(3) 引き続き、主題化構文に関して考察を進め、その過程で、これまでの教育的慣行において一つの文法項目として扱ってきた学習対象を、文型レベルで分割・分散することによって、従来は難度が高いと見なされてきた文法項目の難度を抑えられることがわかった。例えば、(a) 動詞接尾辞“了”および文末助詞“了”についての研究、(b) “把”構文という文型の中で提示される「文型ごとの補語」についての研究である。

(4) (1)-(3)の研究過程においてわかってきたのは、各種補語・主題化構文・助詞“了”・“把”構文は、どれも教授者が最も慎重に導入する文法項目であるものの学習者にとっては最も難しい学習事項であるが、いずれも学習者にとっての習得難度の高低は、文法項目の種類よりも文法インストラクションの種類に強く左右されるのではないかという点である。

(5) 所属大学の異動前後では、学習者調査は実施できなかったが、中国語学習者ができるだけコストをかけずに習得上の利益を享受できる（即ち、より容易・より早期に目標形式を産出することができる）文法シラバスの設計方法を進展させるには、(a) 中国語のどのような文法項目が投射性項目であるかを明らかにすること、(b) ある文法項目の習得上の難易度を抑制する文法インストラクションを示すことが必須であることが確認できた。

(6) 所属大学異動後の2018年度では、上記(5)(b)の点に研究活動を集中させ、その結果、これまでの教育的慣行において一つの文法事項として扱ってきた学習対象について、(5)(b-1) 語レベルではなく文または文型レベルで示すこと、(5)(b-2) 当該の文/文型を構文的意味や構文上の形式によって分割・分散することの重要性を確認できた。

(7) そして、今後の研究につながる見込みとして、中国語学習者ができるだけコストをかけずに目標形式を産出できる文法シラバスの設計という目的の達成には、投射モデルの適用可能性を確定することも有益ではあるが、それよりも、教育現場で実施される文法インストラクションによって習得上の難易度を抑える方法を探るほうが現実的であり、教育環境の現状にも資するところが大きいのではないかという示唆が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

[1] 西香織、鈴木慶夏（2018）「中国語初中級における比較表現の文法事項分割・分散化試案」（査読無），北九州市立大学『国際論集』16号，127-144頁。

[2] 鈴木慶夏（2017）「中国語教育文法設計の必要性 —バックワード・デザインによる中国語学的文法からの解放—」（査読無），『杉村博文教授退休記念・中国語学論文集』杉村博文教授退休記念中国語学論文集刊行会，白帝社，177-196頁。

〔学会発表〕（計 13 件）

[1] 鈴木慶夏 从“(是)……的”句式偏误情况看现行教材与教法的反思, 第三届汉字文化圈汉语教学国际研讨会(河内国家大学下属外国大学)(ベトナム・ハノイ), 予稿集 706 頁. 2018 年 12 月 8 日.

[2] 鈴木慶夏 「“(是)……的”構文」から「参考情報ぬきだし構文」へ—文法研究の成果をいかに教育用途に加工するか—, 日本中国語学会2018年度北海道支部例会. 2018年9月21日.

[3] 鈴木慶夏 「(A)誰が先に家に帰る、(B)誰がご飯をつくる」—「(A)と(B)は因果関係にある+疑問詞『誰』は任意用法である」この説明わかる?— 神奈川大学人文学会. 2018年6月20日.

[4] 鈴木慶夏 “把”構文に必要な教育文法とは—文法事項の分割・分散による文型化試案—, 中国語教育学会第15回全国大会(関西大学), 予稿集 76-80 頁. 2017年6月4日.

[5] 鈴木慶夏 在二语汉语教学中首先要学哪一种“了”?—从日本学习者产出的中介语角度看, 第四届汉语作为第二语言研究国际研讨会(中国华东师范大学)(中国・上海), 摘要集 61 頁. 2016年8月20日.

[6] 鈴木慶夏 第二外国語初級段階で最初に学習する“了”—処方的アプローチによる導入形式の選択—, 中国語教育学会第14回全国大会(日本大学), 予稿集 40-43 頁. 2016年6月5日.

[7] 山崎直樹、植村麻紀子、鈴木慶夏、中西千香、西香織. 「外国語学習のめやす」に基づいた文型リストの構築—その枠組みと構築例, 外国語教育に関するセミナー&ワークショップ第2部(九州産業大学). 2016年1月9日.

[8] 山崎直樹、植村麻紀子、鈴木慶夏、中西千香、西香織. C目標からC文法へ—コミュニケーション能力指標から設計した機能的タスクと文型リストの提案—, 第64回日本中国語学会全国大会(東京大学), 予稿集 63-64 頁. 2015年11月1日.

[9] 鈴木慶夏 「文法は体系である」の「体系」とは?—名前を付けて保存する文法知識と上書き保存する文法知識—, 第64回日本中国語学会全国大会(東京大学), 予稿集 244-248 頁. 2015年11月1日.

[10] 鈴木慶夏 试论控制“*我吃午饭在食堂”的教学法—何种语言知识能够发挥产出“我在食堂吃午饭”的语言能力?, 德国汉语教师协会第19届汉语教学研讨会, (Göttingen University) (Germany), 摘要集 16 頁. 2015年9月24日.

[11] 山崎直樹、植村麻紀子、鈴木慶夏、中西千香、西香織. 文型からコミュニケーションに至る方法とコミュニケーションから文型に至る方法, (共著), 日本中国語学会北海道支部例会(釧路公立大学). 2015年9月11日.

[12] 鈴木慶夏 ライティング支援としての“i+1”，中国語教育学会第13回全国大会（龍谷大学），予稿集 65-68 頁。2015 年 6 月 7 日。

[13] 鈴木慶夏 如何控制“*我学习汉语在大学”等中介语形式的产出？—从语言习得与语序类型学角度探讨有关语法的教学法，第一届语言学与汉语教学国际论坛（University of California）（Davis, U.S.A.）Proceedings, 57 頁。2015 年 5 月 9 日。

〔図書〕（計 3 件）

[1] 鈴木慶夏 《日本中文教学研究》（海外汉语教学名家论丛）华语教学出版社（中国・北京），1-219 頁。2017 年 5 月。

[2] 古川裕監修・鈴木慶夏 著 『アクション！开始！2—コミュニケーション中国語—』朝日出版社，1-164 頁。2017 年 1 月 15 日。

[3] 古川裕監修・鈴木慶夏 著 『アクション！开始！—コミュニケーション中国語—』朝日出版社，1-142 頁。2016 年 1 月 15 日。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。